世界の漂流者 in ネギま

一条　欅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の漂流者　ｉｎ　ネギま

【Ｎコード】
Ｎ７２８８Ｙ

【作者名】
一条　欅

【あらすじ】
平凡とはちょっと違う生活の中、父の遺品から異能と呼ばれている力を目覚めさせ、それ以後は様々な世界を見て渡り歩き、常に戦い続けて来た少年（？）の物語。
多くの世界を見て、感じ、その世界で幾つもの結末を迎え入れた行き着いたのは、『魔法先生ネギま！』の世界。
転生モノとはちょっと異なる二次創作小説です。
※最強モノやアンチ、原作ブレイクｅｔｃを含みます

プロローグ　『牢獄の終わり』（前書き）

と言う事で、形になり始めたところでプロローグを投下してみました。
まだ此処では名も出ていなければ、転生モノの様に神様などが出てくる描写もなく、色々吹っ飛んでますが……
それはさておき（まて）、随分寒くなりましたね。

プロローグ　『牢獄の終わり』

「ぐっ……！」

展開された何十何百と言う術式陣に自身の生命力を随時、魔力・法力・霊力・妖力の四つへ変換させて供給を行う。
身体中に痛みが走る。
打ち付けたような、押し潰されるような、斬り付けられたような、刺し貫かれたような、引き裂かれたような。
痛覚に痛みを伝えてくる。
幾度と繰り返し感じた痛みであっても、やはり痛いものは痛いものだ。

「ッ――――――！！」

声にならない叫びを上げる。
まだまだ、術の発動までは遠い。
未だに十分の一にも満たない、展開済みの術式陣を、更に重ねること十度。
描き、重ね、織り交ぜ、示し、伝い、流し……
『世界』そのものを、塗り替える。
『世界』と言うものを、書き換える。
この世界が、果てなく続くようにと願いを込めながら。
百十四度と繰り返された、この牢獄の世界を。
百十四度目の、『世界昇華』を。

たった数年、もしくは数十年しか続かないであろう、『物語の世界』

を、『ひとつの世界』として、造り変える。

「チッ……」

背中が急に軽くなる事に対し、舌打ちする。
重心を両足から左足のみに変えて、重心を保つ。
背中の右側の翼が一枚、崩れ落ちた。
それに続くように、左側の翼も一枚、崩れ落ちる。
急激な力の消耗に、受けられる恩恵が途絶していく。
また一枚、また一枚と、七対十四枚の翼は、崩れ落ちていく。

額から生える、歪(いびつ)な二本の角も、
頭部にある獣の耳も、十本の尾も、尖った犬歯も、
自分に宿る力が、還元されていく。

「核翼(コアバス)……！！」

足りなくなりつつある生命力を、異なる力で補う。
三十二対六十四枚と、余った一枚の、翼とも言い難い、硝子の破片とも言えるそれを展開する。
けれどやはり、一枚一枚明滅してその形を失っていく。

――決定的に、力が足りない。

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

蒼い左眼も、紅い右眼も、顔を覆う白と黒の文様も、次第にその色を失っていくのが分かる。
どれだけの力を持っていても、
それがどれほど、世界樹や神と言える存在達に匹敵するものであっ

ても、
戦うだけの力では、本当の意味で世界を変えるなんてのは、無理なこと。
だから、その世界樹や神に請う。
自身を見て、信じてくれる、世界樹や神々に願う。
声が交わせるのなら、またか、と呆れながら言うだろうか。
けれど、今だけは――――

――これが、この牢獄（せかい）の終わりであって欲しい。

そう、願いたい。

「術式展開……っ！」

『世界昇華』の術式を展開し終え、続け様に違う術式を展開する。
世界と世界の狭間に存在する『次元の狭間』へ到達する為の召喚術式『断界門』。
術式を展開し、詠唱文を捧げ、展開を進めていく。

「はぁ……はぁっ……まだ、だ……」

息が苦しい、視界が霞む。
音も遠く、手足の感覚すら失い始めてきた。
けれど止まる事は許されない。
止まってはいけない。
立ち止まる事だけは、許されていない。

「ひら、け……だんか、い……もん……」

ちゃんと言葉に出来ているかは分からない。

でも、空間の歪みが生じる事で、世界の扉が開いた事を、霞んで視えなくなりはじめた視界が捉えた。

「導け……」

吸い寄せられるように、世界の扉へと向かう。
足を踏み入れ、『世界昇華』の術式が作動し、世界が歪んだのを確認する。

また、ひとつの世界での『生』を終え、違う世界を目指す。
今度ばかりは、この牢獄の世界から、抜け出せるように、と――

プロローグ　『牢獄の終わり』（後書き）

短編として以前投稿した『世界の漂流者』のその後です。
とは言っても、主人公の時系列では、その後と言っても故郷に別れを告げてから、主人公の体感時間で約千百年間かかっていますので、かなりアレですが……。

兎も角、原作にちゃっちゃと関わっていきたいですね。
それではまた次回？

プロローグ．２　『世界と、出会いと、故郷の夢』（前書き）

とりあえずプロローグ第二話投稿。
行き着いた場所は、ネギま！の世界。
メインヒロインとか決まってないですが、始まりの場所からある程度定まっているような気がしている。

※一応、主人公は原作と言うものを知らない設定です。

プロローグ・2　『世界と、出会いと、故郷の夢』

いつもと変わらない時間が流れていく。
いつもと変わらない別離が訪れる。
いつもと変わらない戦争がある。

過去も、未来も。
ずっとずっと、起こった事も起きる事も、同じで。
この千六百年間、ずっと変わらない時間だけが流れていった。

ただ違うのは、別々の世界で、そこで仲間になった者達、取り巻く環境、時間の流れ……
そう言ったものだけが、違っていて。

けれど、そこには絶対争いがあり、例え無くても、火種はあって。
自分がいて、争いが起きて、命の奪い合いになり、世界はひとつの歴史に幕を閉じ、自分はそこから居なくなる。

それは多分、ずっと変わらない事で。

戦う以外の意味を探して、世界を彷徨い、気が付けば結局、戦う事しか出来なくて。

ただ、望まれるがままに、力を奮い、先導し、勝利をもぎ取り、違う世界を目指すだけ。

ずっと変わらない。

きっと永遠に。
死すら失った自分の、罪であり、罰であるように。
ただ永遠に、永久に、続いていく、血の臭いしか漂わない……人生。

◇

瞼の向こうが、光で明るい。
目を見開けば、やっぱり太陽の光が差して、少し眩しい。

「ここ、は……」

知らない天井、なんてありきたりな言葉が、そのまんま現状に当て嵌まるのが、若干悲しい。
建築様式は、極東の島国……なんて言うと怒られるかもしれないが、日本らしい木造建築の天井。
まぁ、自分も一応は日本生まれの日本人なんだから、自分の国を卑下するようなことはしたくない。
……そんな事言っても、千六百年も生きて、色んな世界を見て回ってると、そんな事もどうでもよくなってしまう。

「いやいや、その前にここがどこだか確認しないと」

まだ少しボーっとしている頭を覚醒させるように、軽く頭を振る。
バサバサ、と長い前髪が鼻や頬をくすぐる。
視界はいつもどおり、左半分だけ。
右半分……右眼に手を当てれば、いつもと変わらない眼帯がある。
後ろ髪を掻き上げ、どれだけ長いかを確かめている。
いつもと変わらない、無駄に長い髪だ。

「やっぱり、日本……だよな……」

自身を確かめる過程で部屋を見渡すと、やはり日本だ。
畳や襖なんて、特にそう。
日本の存在する世界ではなくても、近い建築様式をする世界はいくつもあるけど、大抵の場合は日本だ。
この世界の暦が、西暦である、と言った方がいいのだろう。

「……うん、西暦って言えば、しっくりくる」

そんな感じで頷きながら、とりあえず自分が寝ていたらしい布団から抜け出して、襖を開ける。

「おおぅ……」

つい感嘆の声が漏れる。
砂庭式枯山水……で合ってると思うが、立派な庭園ですこと。
……いや、そうじゃなくて……いや、確かに立派ではあるが。
兎に角、縁側とか、日本庭園とか、正に日本らしいと言うか何と言うか。
しかし、見た感じでは建物の中では中枢から少しずれるくらいの位地だろうか。
周囲の通路が多い事から、多分間違ってはいないと思う。
とりあえず、周囲の人の気配を探ってみる。

「……人の気配が多い……」

人の気配は確かにあった。
すぐ近くに一人、少し離れた所には十数人、それよりも離れると、

四方向に合計六十人くらい？
寺か神社か、何かなのだろうか。
それに……

「……結界？」

広範囲の結界が張られている事に気付く。
結界……それも、東洋独特の術式のもの。
神道か、陰陽術か……多分、その辺りだとはおぼろげではあるものの、分かった。
寺か神社か、と言う推測はどうやらあながち間違っちゃいないようだ。
由緒ある家系などでは、拠点などに結界を張るものだ。
魔除けや妖除けと言ったものを。

「そうか……逆に考えれば、“そういうもの”がある世界なのか……」

そう判断する。
未だに覚醒しきっていない頭は、今より僅かに前の記憶を呼び覚ますのに酷使し、思い出してみる。

「っ……」

ノイズがかかったように、やはりおぼろげにしか思い出せない。
けれど、三百年もの間、たった数年間の世界を何度も何度も繰り返していたのは思い出せた。
抜け出せない牢獄の世界。
戦乱の世を走り続けるしかなかった、あの世界。

「……とにかく、抜け出せたんだな、俺は……」

その事に安堵する。
あの世界は、本当に厄介だった。
ひとつの世界が物語としての結末を迎え、その世界から去ると、気が付けば似て非なる世界に堕とされる。
そんな世界を何十回も繰り返し、今、やっと俺は抜け出せたのだと自覚する。

「ははっ……」

乾いた笑いが漏れる。

「そっか。やっと、終わったんだな……」

味方だった者が敵になり、敵だった者が味方となる。
それを繰り返さなければいけない世界だったから、正直、狂ってしまいそうだった。
……いや、もう既に、狂っているのだろうけれど。

「あ、目を覚まされたのですね」

不意に声がかかる。
声の聴こえた右方向を見ると、水の入った桶とタオルを持った、巫女装束の少女。

……なぜ、巫女？

いや、神社とかなら別におかしくはないか。

「えっと、俺は、一体……？」
「あぁ、少し待っていてくださいね。今、長様を呼んで参りますから」
巫女装束の少女はそう言うと、サッサと小走りに走り去る。
……と思いきや、咄嗟に止まってこちらを向くと戻ってきて、俺が寝ていた部屋に入って桶を置くと、また走り去っていった。
「……待てって言われたし、とりあえず待ってみるか。状況も把握できていないし」
軽く捻りを利かせて右向け右。
目指すは寝ていた部屋。
歩きだして、入って、適当に座るだけ。
なんだが……
「……おかしい」
ふとそんな言葉が漏れた。
いや、うん、気付かなかった方がおかしい。
「……はぁ……」
自分の手を見て、身体を見て、そして重い溜め息。
「やっちまったなぁ……」
どうやら、身体が縮んでいる。
多分、俺がまだ人間だった頃の……六歳くらい。
そりゃ、あの巫女装束の少女が俺より背が高いはずだ。

だが……うむ。

「タイムドロップか……これまた厄介だ」

可能性としては、有り得無くは無い。
覚醒しきった頭で、思い出せる最新の記憶を呼び起こせば、世界から離れる際に、神さん方の力を借りて世界の構造を変化させたのだ。
世界昇華、とでも言えばいいのだろう。
世界の構造そのものを変化させ、“世界としての寿命”を延ばす。
ただそれだけの事。
勿論、難しいと言うか、まず可能な事ではない。
世界と言うのは、世界樹と呼ばれる最上位の存在や、神々などの神格ある存在、そして生命の想念などで成り立っているものだ。
ただ、それが可能だったのは、自分と言う個人が、多くの神々との契約状態にあった事や、世界樹と言う世界の始祖と良き隣人であった事が第一に挙げられる。
そして、その世界が、真の意味で、ただ想念(おもい)だけで形作られた、短命の世界であった事が理由だ。
その構造を世界樹や神々の力を借りて、神の管理する世界として変換し、崩壊を招かせず、常に正常の状態に保つと言うだけ。
三つ目の理由として、自分が『神の力』を使えた事。
これは、故郷の世界で『異能』と呼ばれる、神が人間達に悪戯に与えた力があったからだ。
世界生誕の『創造』と『破壊』の二つの異能を持ってして生まれたのだから、ある意味生まれながらにして人間じゃなかった、とも言えるのだろうが。
勿論、それ自体も特殊過ぎる条件下での事だから、出来る事自体がおかしい。
それでも出来てしまうのは、生きてきた中で『力』と言うものに渇望し、手に入れてきたから……になるんだろうか。

そして、その反動が、現在。
知識上、五大元力と呼ばれている、氣力、魔力、法力、霊力、妖力の五つに併せ、
多種多様の種族の力や異質な能力を使えば使うほど、自分の身体は時間を遡る。
そうは言っても、身体年齢は十八の頃から止まってしまっていて、身体と言う時間を逆行出来るのも経験上では六歳の頃まで。
そう考えると、『俺』は自身の許容量の限界まで、『力』を使ってしまったのだろう。
意味は異なるが、『異形』と呼ばれる世界のはみ出し者達に与えられた、呪いのようなものだ。

種と言う枠に収まらなくなった者達……『異形』の者は、“本来の自分”の許容量を遥かに超える力を使うと、身体の時間を遡る。
例えば、自分で言うなら、異能を持った人間、と言う許容量しかない。
勿論、多少なりと氣や魔力はあっただろうが、それも計算しても、たったそれだけでしかない。
その異能を持った人間と言う『個体』の枠から外れ、『異形』になる事で、それ以上の力を使う事が出来る。
とは言っても、過去に会った事のある同じ『異形』は、たった六人しか会った事が無い為、実際にはどういう条件下で引き起こされる現象なのかは定かではないが……

推論でしかないが、人間と言う枠の中に、『異能』や『種族の力』などの先天性能力や、『魔力付与』などによる恩恵、高位の存在との契約などで、加算された分が、その個人の力になる。
だが、『異形』と言う種族は、力を使おうと思えば、“自分の方から世界へ干渉出来る”、世界樹や神などの存在に近い、イリーガル

な種族。
老いることなく、死ぬこともなし。
勿論、消滅と言う形で『死』を得られるが、魂の輪廻に再び戻る事は出来ない。
これは肉体も魂も、在らぬものとなるからであるが……まぁそれはさておき。

本来の自分の許容量と、加算された許容量までは、『異形』としてのキャパシティだ。
しかし、『異形』はそれ以上の力を引き出す事の出来る異質な種族であり、『異形』としてのキャパシティさえも超える力を容易に使用出来てしまう。
敢えて言うなら『異形』とは、“不自由であり自由ではない”種族、と言った感じだろうか。
ただでさえ、本来のキャパシティより超える力を使うだけで、“代償”を支払う必要性があるのに、異形としてのキャパシティさえも超えれば、その代償は遥かに大きくなる。

自分の場合では、本来のキャパを超えれば、その分だけ『感情』を代償として支払う。
力を使えば使うほど、感情のない存在へとなっていく、と言う事だ。
無論、ある程度時間が経てばそれも回復する。
そして、異形のキャパを超えた場合では、その分だけ『時間』と『力』を代償として支払う。
時間は既に言った様に、肉体的な時間を逆行する。
六歳から十八歳までの十二年間の時間を、超えた分だけ支払う。
力は、言うまでも無いが、魔力などの五大元力や、異能の力、取り込んだ異種族の能力など、“発現し、情報を改変する力”全て。

「……となると、今の状態で使えるのは大して“深く”はないか」

拘束具の解放が出来ても、取り込んだ種の力は使えないし、後天的な力も殆ど使えないだろう。
良くて、魔法や魔術、あとは氣術関連。
“身体的時間の回復”を待てば、順次戻ってくるだろうが……。
無論、『異形』は“不自由であり自由でない”とは言え、どんな種族からも迫害を受けるに等しい、神さえも敵視するイリーガルな存在なのだが……。
そんな思考の海を漂っていると、気配を探る必要もないほど、誰かが近くに来ているのを感じた。
七人、か。

「やぁ、目を覚ましたんだね」

縁側の廊下から顔を見せて、膝に手をつきながらそう言ったのは眼鏡のおっさん。
おっさん、誰？……なんて言葉は流石に失礼である為、口には出さなかったが。

「貴方は？」

六歳と言う身形を使い、首を傾げながら、見上げる。

……ちょっと、鳥肌が立った気がした。

「私かい？　私は近衛詠春。この神社の神主……と言っても、分からないだろうね」

六歳の子供と言う、見たままの人間だと思っている、と見てもいいのだろうか。
こっちの見解じゃ、もう丸わかりだって言うのに。
……今の俺じゃ破れそうにはないが、かなり上位の結界に、この近衛詠春と言った奴は、多分戦士か何か。
身のこなしとかは正に前衛系の典型と言ってもいい。
血の臭いがしないのは、現役から離れたからか？

「君の名前を聞かせて貰えるかな？」
「戒人……」

敢えて名だけを名乗る。
こう言う取り入り方は経験上の常套手段、とでも言った所か。

「苗字は？」
「……」

姓に関しては答えない。
どちらにしろ、長年名乗ってきた姓ではあるが、忌み名に近い。
本来なら、姓も名も、違うんだから。

「……そうか。じゃあ戒人君。質問するけど、どうして君は庭に倒れていたんだい？」
「どうしてと言われても、自分には何も……」

分からない、と言うのは別に嘘ではない。
この世界に渡った時の記憶がない。
気を失っていたのであれば、記憶が無くて当然だろう。

「うーん……どうしたものかな」

近衛詠春はそう言って顎に手を当てて僅かに首を傾げ、あさっての方向を見る。
しかし注意は、“こちら”に向いたまま。
多分、俺がこの世界に来た時に何かあったのだろう。
……いやまぁ、庭に倒れていたと言う時点で、それがあったと言う事実はあるのだが。
その事を含めながら、また違う注意を向けている。
憶測でしかないが、この世界に来た時、俺は“堕ちてきた”と言う可能性。
つまり、結界内に進入した際、何か反応したのであれば、“そっち”関係の存在だと言う事が確定する。
詳しくは分からないが、神社などで張る結界と言えば、魔除けかそこらだろう。
それに反応したのならば、俺は“そういうもの”と言う事になる。
加えて言えば、元力……特に、魔力や妖力の類が知られたら、人間だろうが妖魔の類だろうが、そう言った関係者、又は当人である事も分かってしまう。

全く、厄介な所に堕ちてきたようだ……。

「あの、自分はどれくらい寝ていたのですか？」

なるべく丁寧な口調で、けれど、歳不相応の口調で尋ねる。
俺の言葉に反応するように僅かにこちらに向けている注意……いや、敵意に近いものが鋭くなる。
やはり、ただの神社などではないらしい。
それも浅い関係ではなく、深く結び合ったもの。

「君が庭に倒れていたのを発見したのは三日前の早朝だったよ」

と、六歳程度には分からないであろう言葉で答えてくる。

「と言う事は三日も寝ていたんですね」

近衛詠春の向こうに見える庭園の草木の種や色、澄んだ空気と気温の低さ、僅かな日の傾きから、今が春頃である事を感じ取りながら、俺はそう答える。

そして、決定的な言葉を添える。

それは起きた時から僅かに感じていた違和感。

身体的時間の逆行ではなく、身体が熱を持っているような感覚。

俺は確かに、落下、と言う意味で落ちてきたんだろう。

落下時のダメージで傷を負っているはずだ。

結界の効果範囲からしても、それなりの高さから。

けれど三日も寝ていたなら、速度が劣っていても大抵の傷なら治るはず。

「なら、“傷”は“治っていてもおかしくない”か……」

すると、やはり敵意の色が明確に見えてくる。

近衛詠春だけじゃなく、傍に控える巫女達からも、だ。

「……すみません、少し疲れました。休んでも構わないでしょうか？」

そう告げると、敵意は収めずに近衛詠春は言った。

「うん、しっかり休みなさい。次起きた時には色々話を聞かせてもらうけどいいかな？」

「はい」

俺は軽く頭を下げ、布団に入る。
そして、言い忘れていたように……

「ああ、“監視”は付けてくださっても構いません。貴方がたが自分を警戒しているのは、痛いほどに分かりましたから」

俺の言葉に反応を見せない近衛詠春は、それだけ苦難の道を歩んだのが分かったが、付き人の巫女達は動揺を隠し切れなかったようだ。
“そういう関係者”であるなら、もう少し鍛えた方が良いんじゃないだろうか？
そんな事も思うが、今はどうでもいい。

……疲れたのは本当で、身体が睡眠を欲しがっているのが、良く分かったから。

布団に入り、瞼を閉じれば、すぐに意識はまどろみの中へと落ちていった。

◇

『力』なんてモノが、欲しかったわけではない。
ただただ自分は、平凡とは言えなくても、普通に暮らしたかっただけだった。

世界各国に支社を置く大企業・北条グループの御曹司なんて言われて、それは平凡とは言えないだろう。
けれど、それは兎も角、一人の“人”として、普通に暮らしていきたかった。
例え自分が、研究材料や実験対象で、偽りの記憶を植えつけられた者であっても、自分は、与えられた生活が好きだった。
息子に声すらかけない父親に、流石は俺の子だ、って言って欲しくて、色々学んだし、運動だってできる様になった。
認められたかった。
家族として。
そして、父は再婚し、義母と義妹が家族に加わり、それからはまた、一層幸せを望んだ。
金銭とかそう言うのは無しにして、ただ“家族”と言うものに憧れていたのかもしれない。
父・蒼矢、義母・亜夜、義妹・刹那。
父は忙しく、幼少の頃は義妹の刹那と共に、義母の家の雪村流剣術を学び、ある意味、趣味の様なものだったし、
義母は義理の息子になる自分に対して、初めて愛を注いでくれた人だった。
義妹に至っては、年齢は同じになるが、兄妹と言う関係になり、かけがえのない存在になっていった。

けれど、そこに父は居らず。

最早、父が、親として子へ愛を注ぐ、なんていうものを、忘れていくしかほかになかった。
だから、なのだろうか。
アメリカへと長い留学をする事に、何の抵抗もなく、ただ言われるがままに留学した。

自分は八歳の頃から、四年を掛けて大学を卒業し、義妹は六年掛けて卒業した。
二人とも卒業した事から、一度は故郷へ帰るという選択肢を得たが、結局それから四年間はアメリカで過ごしていた。

十年経ったある日、父の弟……叔父から一報が入る。
父と義母の事故死。
自分は父の死に対し動じることはなかったが、愛情をくれた義母の死にはさすがに同様した。
義妹に至っては、泣き崩れるほどのショックで、兄妹二人で帰郷した。

葬儀や相続、後継者など、様々な問題がありつつも、全て自分で執り行い、叔父に「成人するまで」と言う条件をつけて北条グループの社長代理まで任せたのは、今思えばかなりバカらしいものだ。
叔父は白凰学園の学園長でもあって、北条と言う家系では第二の権力者。
人柄も良いし、信用はできる人だった。
だから、『俺』は妹と二人、白凰学園の高等科三年として、二年間と言う猶予を貰い、飛び級して大学を卒業した身でありながら、高校生活をする事になった。

あの時は流石に父親と言う者に対し、呆れ返ったものだった。
北条本家の邸宅が、白凰島まるまる学園都市のほぼ中央部にあったのは仕方のないことだが、明け渡して学生寮にするなんて、全くふざけたものだ。
帰るべき実家が学生寮になる。
父に文句を言ってやりたかったが、亡き者に口などなく。
承諾せざるを得ず、一応寮長として自宅を守ったが……まぁ、悪くはない生活だった。

……けれど、そこから『ちょっと違う平凡な日常生活』からは一転してしまった。

父の遺品。
小さな木箱。
その中に入っていた、大きな黒い眼帯。

それが、全てを変えてしまった。
きっと、それに気付かなくても、同じ事になっていたかもしれないだろう。
『故郷の世界』に存在した、独特な能力。

――『異能』。

ただその言葉の意味だけでは、特異な能力に過ぎない。
けれど、その力は大きなものだった。

神が、文字通り“悪戯”に、人に与えた『神の力』。

不完全とは言え、神族の力だ。
様々な制限こそあれど、その制限の外では大きな……いや、大きすぎる力だった。

『創造』『破壊』『蒼血』『紅血』『白烙印』『黒烙印』。

本来ならば一つ、稀有なケースであっても二つまで。
後にそう知り、本来ならばもう途絶えたはずの異能を持った、自分。

それが、“戦争”の始まりでもあった。

プロローグ．２　『世界と、出会いと、故郷の夢』（後書き）

と言う事で始まりは関西呪術協会本拠地から。
ある意味メインヒロインは木乃香や刹那辺りになるんでしょうか？
ちなみにですが、今回は前半や後半は、戒人の夢の様なものとなっています。

※補足として
戒人の知る刹那、ネギま！の刹那が、名前的に被っている点について。
これは元々、昔に創作で書いていた『故郷の世界』でのヒロインの名前が被ってしまっているだけですので、特にこれといって関係ありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7288y/

世界の漂流者 in ネギま

2011年11月21日22時42分発行